

【書評・紹介】

アレクサンドル・カンチュガ 著／津曲敏郎 訳

『増補改訳 ビキン川のほとりで—沿海州ウデへ人の少年時代』

(札幌, 北海道大学出版会, 2014年3月, A5判, xii+336頁, 2200円+税)

中 田 篤

本書は、ロシア連邦・沿海地方に住む先住民ウデへのアレクサンドル・カンチュガ氏（1934年生まれ）が、母語であるウデへ語とロシア語で綴った自伝の一部を日本語訳したものである。二部構成となっており、第一部はすでに2001年に同名の本として出版されていたが（カンチュガ 2001）、今回第二部を加え、全体を再構成した上で、増補改訳版として新たに出版された。書名にも使われている「ビキン川」は、アムール川の支流であるウスリー川の支流、ロシア沿海地方の日本海側に連なるシホテ・アリン山脈を流れる川であり、カンチュガ氏やその一族が暮らしてきた地域を象徴している。

第一部「生い立ちの記」は、カンチュガ氏が10年生学校の7年生を終える15、16歳頃までの幼年・少年時代の思い出を中心にまとめられている。カンチュガ氏が物心

ついた頃、タイガの狩猟・漁労民として知られるウデへの人びとはすでにコルホーズで農業に従事するようになっていたが、伝統的な生業活動や物質文化、精神文化を失ってしまったわけではなかった。第一部では、同世代の子どもたちとの遊び、学校や寄宿舎での生活と並列的に、折に触れておこなっていた漁労や狩猟、採集活動、伝統的な道具類、シャーマンの儀式への参加などが日常的な体験として描出されている。

例えばサケのたいまつ漁については、夜に松やにに火をつけたものを舟にかかげ、水中を照らして魚を確認すること、特殊な形をした舟を使い、舳先に舌のように突き出す「張り出し板」の上でヤスを使ってサケを刺すこと、獲ったサケは半身におろし、掛け棚にかけて干すこと、身をとった後の中骨も犬の餌用に干すことなどが描かれている。靴作りについては、まず上下にギザギザの歯がついたなめし台で皮が柔らかくなるまでなめし、その皮を裁断してアカシカの腱を擦り合せた糸で縫い合わせ、皮が水分で伸びないように煙でいぶすといった手順が記されている。

また、こうした伝統的な文化の描写だけでなく、第二次世界戦争中の耐乏生活、従軍した父親から伝聞した戦地の様子など、当時の時代背景を示すさまざまな出来事についても触れられている。

第二部「都会での学校生活」では、カンチュガ氏が7年生の終わりから、進級のためにこの地域の中心都市であるハバロフスクに移り、10年生学校を卒業するまでの3年間の学生生活が中心となる。第一部とは舞台が一変し、カンチュガ氏が都会の学校で勉強や読書、スポーツに打ち込みつつも、映画やサーカスといった娯楽にも馴染んでいく姿が綴られる。学校生活では、ナーナイ、ウリチ、オロチなど、さまざまな先住民の子どもたちが一緒に

表紙画像

学ぶ様子が描かれ、ソ連極東地域における当時の先住民教育の一環を垣間見ることが出来る。

この間、長期休暇の折に帰省しては家族や友人たちと出かける狩猟や漁労、ブルーベリー摘みなどの様子が語られる。特に関心を持ったのは、カンチュガ氏の父の体験として紹介されるトラを仕留める逸話である。トラがいるために狩りの主要な獲物であるシカが猟場に寄りつかないので、父がトラを撃つのである。民族誌などでは、この地域の先住民であるナーナイ、ウデヘ、オロチなどにとってトラは崇拜の対象であり、特別な場合を除いて狩猟してはいけない存在だったとされるが（池田 1999）、少なくとも本書の記述からはトラを神聖視するといった精神文化は読みとれない。当時の時代背景によるものなのか、あるいは伝統的にそうした場合にはトラを狩ることが認められていたのだろうか。

また、同じく帰省した折に、カンチュガ氏を含む少年たちが故郷でもロシア語で話をし、両親がウデヘ語で話しかけても、カンチュガ氏はロシア語で答えていたという状況が記されているのも興味深い。北方地域の先住民が民族の伝統文化を失う要因の一つとして、寄宿学校による教育が挙げられる。つまり、子どもが両親から切り離され、規模の大きな集落や都市に設置された寄宿学校で教育される過程で、民族の伝統的な文化を身につける機会を逸してしまうのである。本書でも、ハバロフスクで暮らすカンチュガ氏が、ロシア語で教育を受け、ロシア語の本や新聞、雑誌を読み、ロシア語のラジオ放送を聞くという生活を送っているうちに、次第に母語であるウデヘ語を使う機会を失っていく様子が自身の体験として語られる。

本書の執筆は、言語学者である訳者の勧めによるものだったとのことである。ウデヘ語を含むツングース諸語を専門とする訳者が、研究資料として、カンチュガ氏に子ども時代の思い出を語ってもらったのがきっかけだったそうだ。しかし、カンチュガ氏自身の直接的な体験や身近な人々からの伝聞に基づく本書は、ウデヘの伝統的な文化に関する民族誌としてだけでなく、全体として1930～50年代当時のウデヘの日常的生活を窺い知ることができる貴重な資料であり、ライフヒストリー研究の素材ともなり得る内容となっている。所々にカンチュガ氏自身によるウデヘの伝統的な道具などを描いたスケッチが挿入されており、特に物質文化に関して本書の内容を理解する助けとなっている。

また、本書には、カンチュガ氏が両親や他の大人たちから聞いた体験談、ウデヘやカンチュガ一族の来歴などに関する言い伝え、民話なども含まれており、ウデヘの民族史や口承文芸に関する資料としても価値があると思われる。

実は、2001年に第一部が出版された際、北方民族博物館の友の会季刊誌（『アーケティック・サークル』39: 18, 2001年）にその内容を紹介する小文を書かせていただいた。その後、2005年、2007年と2回にわたり、カンチュガ氏の住むクラスヌィ・ヤール村を訪れる機会に恵まれ、本書の舞台となった沿海地方のタイガやビキン川の流れを目の当たりにし、カンチュガ氏をはじめとする現地の人びとからさまざまな話を伺うことができた。本書に記されているようなサケの遡上・産卵は、近年はほとんどみられなくなったとのことだった。また、少年時代のカンチュガ氏たちが竿や櫂で動かしていたボートには船外機が付けられ、川を使った移動はより容易になっていた。しかし、針葉樹と広葉樹が混じりあった深い森とそのなかを滔々と蛇行する川、ボートで川を移動する際に感じる豊富な水量や流れの速さなど、現地の風景は数十年を経ても当時とあまり変わっていないように思わ

れた。

第一部が出版されてから10年以上の年月が経ち、当時三部作になる予定とされていた本書のウデヘ語／ロシア語原稿は、現在第八部まで続いているということである。著者と訳者の息の長い仕事に敬意を表しつつ、この共同作業がさらに長く続くこと、そしてできるだけ近いうちに残りの部分の日本語訳が出版されることを期待したい。

参考文献

池田貴夫

1999 「ヒグマをとりまく猛獣群の民族学的位置づけ—北東アジアにおけるツキノワグマ、オオカミ、トラとの比較」『北海道開拓記念館研究紀要』27: 95-112.

カンチュガ, アレクサンドル

2001 『ビキン川のほとりで 沿海州ウデへ人の少年時代』北海道大学図書刊行会

(なかだ・あつし／北海道立北方民族博物館)